

データ管理・保守業務改善サービス

CATALOG

データ管理・保守業務改善サービスとは、ジー・ティー・ワン(株)のツールを活用したコンサルティングサービスです。

ジー・ティー・ワンが提供する『ChangeMiner、FlowMiner、MetaMiner、DQMiner』を利用することで、データが実際に、情報システム内部でどのように取り扱われているのかを、詳細に、短期間で、少ない工数で知ることが可能になります。

近年、企業へのコンプライアンスへの社会的な要請が高まる一方、企業内では、2007年問題やIT調達部門の空洞化のため、情報システムのブラックボックス化が広がり、これらの要請に応えることが難しい状況となっています。

WEB系のシステム開発では、頻繁な機能追加が要求されるため、ドキュメントが実際のシステム一致しないことがあり、直接開発を担当した技術者以外には内部構造がわからない、などという現象が起きています。

このようなシステムのブラックボックス化が広がった状態では、正確性や透明性を確保することは困難です。

システムを可視化しなければなりません。

また、財務諸表などの情報は、すべて情報システムの保有するデータから作成されます。

元になるデータを、正確に品質高く管理しなければなりません。データの品質を高めるためには、業務プロセスを透明化することが重要です。業務プロセスの中で取り扱うデータのあらかず意味(何を表していて、いつ、誰が、何のために、どういう範囲で、どんな計算結果で入力したものか)を共通認識しなければなりません。

システムを可視化し、データの品質を高め、企業が求められるコンプライアンスの基礎を築くために欠かせないのが、「データ管理・保守業務改善サービス」なのです。

サービスメニュー

①データクオリティ診断サービス

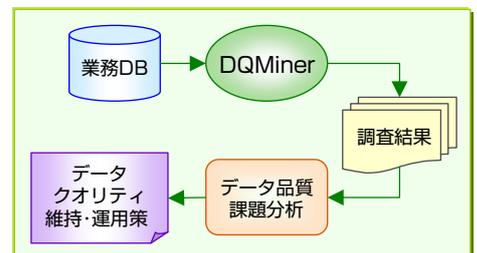
コンプライアンスの基礎は、データの品質です。

データの品質は、データが仕様と異なる入力や利用されることなどがあるため、仕様書だけでなく、実際の値まで見なければ課題を洗い出すことはできません。

データクオリティ診断サービスは、DQMinerを利用し、仕様だけでなく、現状データの値まで調査することで、現状の実態と解決策を提示します。

【進め方】

- ・ヒアリングや仕様の調査に加え、DQMinerによるデータの値を調査することで、現状のデータ品質に関する課題を分析
- ・データクオリティ維持運用策の提示



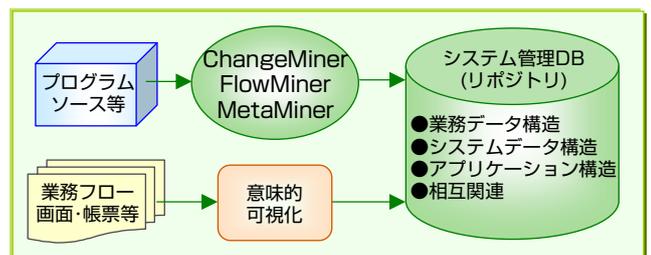
②システム可視化サービス

情報システムの構造が見えなくなった(=ブラックボックス化)ために、システム保守ができない、要員のローテーションができない、という状況に陥りがちです。これを解決するためには、業務を含めたシステムの可視化が必須です。

システム可視化サービスは、システム可視化のための要素(業務上の意味的なデータ構造、システム内部の物理的なデータ構造、システムコンポーネント構造、データにアクセスするシステムコンポーネントの特定など)を、データ総研の業務データ構造可視化技術による意味的なデータ構造可視化と、ChangeMiner、MetaMinerを組み合わせ、業務と情報システムの両面から可視化します。

【進め方】

- ・ChangeMiner(+FlowMiner+MetaMiner)により、情報システム物理構造を可視化
- ・業務データ構造可視化技術を適用し、意味的な(概念)データ構造を可視化
- ・意味的な構造と情報システム物理構造を統合管理する方策の提示
- ・MetaMiner(+TheRepository)による継続的なデータ運用管理体制を構築



③コード統一・マスター統合サービス

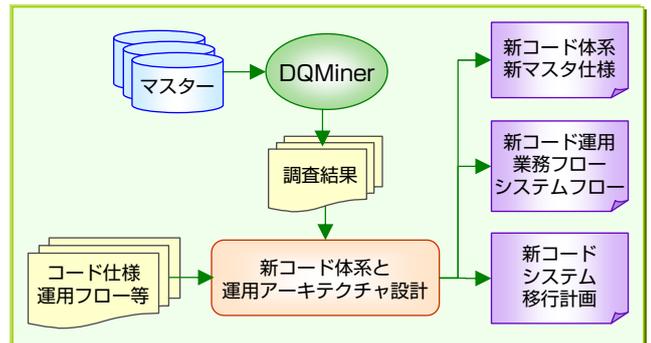
サプライチェーン・マネジメント(SCM)や、カスタマー・リレーションシップ・マネジメント(CRM)、エンタープライズ・リソース・プランニング(ERP)の構築や導入のためには、コードの統一や統合は欠かせません。

また、業務やシステムの統合に伴うマスター統合でもコードの統一が必要になります。

コード統一・マスター統合サービスは、コード統一やマスター統合の調査～移行計画立案～運用体制の構築までをサポートします。

【進め方】

- ・ヒアリングと仕様調査、およびDQMinerにより、現状の実態と問題点を調査
- ・問題点を踏まえた新コード体系、新旧コードの取り扱い方法などの新コード運用アーキテクチャ設計
- ・調査結果と新コード体系に基づき、移行計画立案
- ・DQMinerを組み入れた新たなコード品質保証体制の構築



④システム保守プロセス標準策定サービス

情報システムでは、開発のプロセス以上に、システムの保守や運用のプロセスが、実際のビジネスを支えるために最も重要です。

しかし、「システムドキュメントのバージョンが実システムと合っていない」、「開発から運用部隊への移管手続きが不明確」、ということが原因で、「開発は正しく行われているのに、本番移行時のミスで重大なトラブルが発生する」、といったことが頻繁に起こっています。

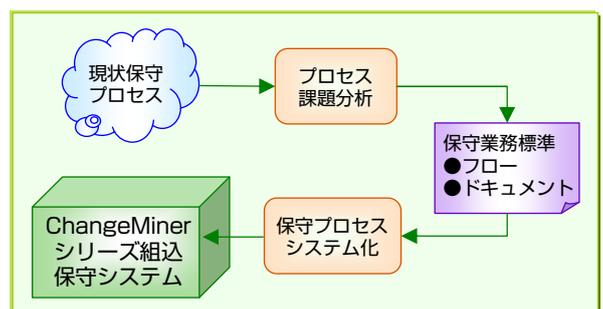
特にWEB系システム開発の場合は、開発期間短縮のためにドキュメントが省略され、本番移行対象が不明確なまま移行される・・・など、とても危険な状態をよく見かけます。

システム保守プロセス標準策定サービスは、システム保守業務を対象に業務可視化技術を適用して可視化し、課題を分析した上で、新たな保守業務の標準を策定します。

また、新たな保守業務標準を守らせるために、ChangeMinerやChangeFlowを活用したシステム化も、必要に応じて検討します。

【進め方】

- ・現状のシステム保守プロセスの課題分析
- ・課題解決策を踏まえた保守業務標準を策定
- ・ChangeMiner(+ChangeFlow)による保守業務のシステム化



株式会社 データ総研

代表取締役社長 黒澤 基博

1985年創立。データ設計と標準化に特化したITコンサルティングファーム。データ中心アプローチ(DOA)のパイオニアとして知られる。

PLAN-DB®、PLAN-CODE®をはじめとする設計技法や開発方法論をベースに、わが国のリーディングカンパニー250社を支援。

現在700件を超えるデータ仕様ライブラリを有する。

東京都中央区日本橋小伝馬町4-11サンコービル TEL:03-5695-1651 FAX:03-5695-1656 <http://www.drinet.co.jp>